

盛者必衰

2023. 7. 21

諸行無常という言葉がある。それほどに諸々の現象は変転していく。「平家物語」の冒頭が思い出される。盛者必衰もまた人間世界の理である。だからと言って、人間には何も打つ手はないかというところばかりも言えないように思う。

個人ならば、訪れること必至の死までの歳月をどう生きるかという問題である。国家になると、これまた訪れること必至の衰亡までの歳月を先に延ばす、それも可能な限り先に延ばすには何をすればよいかということになる。前者は、哲学の問題であり、後者は政治の担当になるだろうか。

この両方が、うまく進んでいると、人々は自信をもつようになり、ゆえに他者に対しても寛容になる。その結果、他国との交流も進むから経済も向上し、政治家たちにも安心して統治を託すようになる。

ところが、諸行は無常だから、個々人の努力とは関係なく時代は変わる。そのことへの対応を怠ると、社会全体がギクシャクしてくる。個人規模だと自信を失い始め、その結果、経済力も劣化し始め、不安になるから他者に対して不寛容になり、自分と違う考えには過度に神経質な反応を返すようになる。つまり、常にイライラしているので、それによる怒りを誰彼となくぶつけるようになり、怒る権利は自分のほうにあると思うようになる。それが、他者への責任転嫁、そして、政治への不信につながる。今の日本は、どうだろうか。どうも対応を怠ってきたのではないか。

ポピュリズムというものがある。日本では、大衆迎合、衆愚政という意味で使われることが多い。否定的な意味で使われる傾向がある。不安に駆られる国民に押されて政治指導者も不安になってしまうと、ポピュリズムへの道に立ちふさがる人はいなくなる。

自分も含めて、もう少し勉強をする必要がある。テレビの街頭インタビューを見ていると、内容を選んで流しているのはわかるが、若者の中には、実にいい意見を言う人がいる。若者が、もっと政治に参加できるようになれば、状況も少しは変わってくるかもしれない。

学校という教育の場にいる者として、自分で考えることができる若者を育てたいと思う。普段から考えるということをしていなければ、急には考えられない。普段には、学校も入る。授業も入る。学級での話合いや生徒会活動も入る。イタリアの中学校に行ったときに、「あなたはブッシュをどう思うか」と、目を輝かせて聞いてきた子どもの顔が浮かぶ。そのときの私は、英語はおろか日本語でも答えられなかった。情けない。

国が衰退していくのは、避けようのないことであろう。盛者必衰の理である。だが、可能な限り先に延ばしたい。その役目を担うのは、若い人たちである。考えることができる若者を育てるために、種をまくのが私の使命である。